

船橋市社会科セミナー通信 第205号

11.1土曜 勉強会報告

1年ぶりに社会科セミナー勉強会を開くことができました！

今回も嬉しいことに 10 名の参加（池田・矢澤・佐藤・富澤・藤木・長岐・円城寺・強田・隈・浜本）となりました。会場はいつもの船橋市勤労市民センターで。

皆川名誉会長は手違いで不参加となり、残念でした。

勉強会は まず「近況報告と情報提供」から

以前の「社会科セミナーへの要望・意見」で、「毎回の参加者から意見や情報を今まで以上に求める方向が望ましい」「この会は、いろんな立場で意見が言えるし、会員からいろんな情報や意見が聞けることがよい」との意見があったことを踏まえて、今回もまずは「近況報告と情報提供」から始めることにしました。

[池田義光] 長野県安曇野市在住 10 年になりました。相変わらず毎日のジム通いを続けております。ライザップのような身体作りではありませんが、健康維持とおしゃべりには役だっております。また歴史関係では「安曇誕生の系譜を探る会」「歴史サロン」「山城探索の会」「古文書勉強会」「近代自由主義者、清沢冽の勉強会」などに参加し、最近はただ聴講するだけで無く、自分から発表することが多くなりました。特に「信州の戦国史勉強会」は毎月のレポーターとして力を入れております。「安曇誕生の系譜を探る会」の「会報」には、「紫式部が源氏物語を書けた歴史的背景」「歴史上の人物の名前に関する豆知識」「武田信玄は天下を取れたか」の歴史エッセイ 3 本を掲載されました。3 月には奈良探訪で、平城京跡をじっくりと見てきました。それは本セミナーの HP に『探訪記』を掲載しております。

[佐藤一巳] ほぼ毎日午前中はジム通いで、1 時間ぐらい泳いでいます。ジムの中では若手です。午後は民生委員の仕事をしたり、主夫をしたりしています。無職 11 年目。病院の友の一人です。

[富澤眞也] 講師として相変わらず中学校で勤務しています。授業数が多いので毎日忙しく、でも楽しくやっています。休みはジムに通ったり、旅行したりして、自分の時間を大切に過ごしています。

[藤木信弘] 再任用フルタイム 4 年目です。年金がもらえる来年までは、頑張ります。

[矢澤基裕] 現在は千葉県教育庁葛南教育事務所に勤務、管理主事 2 年目です。社会科から離れて長くなりました。もう一度勉強したいです。早く現場でたいです…。

[長岐勉] 退職後から始めた俳句作り。苦心しながら作句しています。脳の訓練に役立っていると思います。

[善財利治] 再任用フルタイムを 5 年やった後、この 4 月から東京家政学院高校と東洋大学京北高校で講師をやっています。「公共」と「歴史総合」を教えています。

[強田裕一] 指導課指導主事 3 年目となりました。G I G A スクール構想で I C T 機器の活用、今後は生成 A I も活用していくことになりそうですが、「学び合い」「問題解決型学習」「中心概念と単元の構造化」は原点であると感じています。今後もよろしくお願ひ申し上げます。

[円城寺淳] 船橋市立高根台第二小学校勤務。4 年生を担当しています。社会科は自宅で勉強したり、

旅行で見学したりして楽しんでいます。

[限三智夫]初めて参加させていただきます。これから船橋市の先生方にご指導いただきながら、努めて参ります。よろしくお願ひします。

※このほかに[浜本孝之]さんも参加してくれました。今年から船橋担当を外れ東京担当になったそうです。→[浜本孝之] 長らく千葉県の先生がたにはお世話になりましたが、この秋から東京都担当になりました。先生方のご健勝と本セミナーのご発展を心から願っております。これまでありがとうございました。

本セミナー名誉会長の皆川征夫先生は、参加の申し込みがありました、当日都合により不参加でした。

[皆川征夫名誉会長の 昨年の報告] 長らく教育職にありましたが、本年 9 月をもって教育長を退任いたしました。思えば教育は大変すばらしい仕事でした。長年教育に携われて本当によかったという感慨であります。

「本セミナーの現状とこれから」及び「社会科楽しむ会の立ち上げ」

会長の池田義光が、長野県安曇野市に住んでいるので、どうしてもセミナー開催の間隔が開いてしまいます。今回も 1 年ぶりでした。その上、定年後約 10 年なってしまい、授業から遠ざかっている現状では、本来社会科セミナーで採り上げるべき社会科指導について、セミナーで採り上げることが少なくまた困難になってきました。そこで現在は会長を現役の教師と交替して、会の刷新と本来あるべき姿に戻すべく取り組んでいるところであることを報告し、参加者の理解と了解を得てあります。

そこで、時期新会長にバトンタッチするまでは、池田が引き続き本セミナーの中心を担い、同時に今回から社会科教師の授業力向上のための「船橋市社会科セミナー」とは別に、社会科好きの人たちが授業とは離れたことも趣味として一緒に語り合うための「社会科楽しむ会」を立ち上げて、当分はセミナーと同時に開催して行くことにしました。そして今回が「船橋市社会科セミナー」と「第 2 回社会科楽しむ会」の開催ということになります。

勉強会1本目: 紫式部が源氏物語を書けた歴史的背景

池田義光

参加者の誰でも知っている「紫式部」と「源氏物語」のことですので、これは 3 人グループの学び合いの形式で行いました。一方的な講義形式より遥かに皆さんのが参加意欲が喚起され盛り上がりました。

皆さんからは、以下のようなたくさんの考えが出されました。

- ◎藤原道長から援助があったから
- ◎紫式部の夫の死が会ったから
- ◎紫式部は漢文の教養があったから
- ◎このころ紙の普及があったから
- ◎和歌の文化が物語の文章に影響した
- ◎紫式部たちはたくさんの時間（ひま）があったから
- ◎紫式部たち宮中女官には家庭教師をやれるほどの教養があったから
- ◎当時の女性貴族の間には「ひらがな」が普及していたから

ここで、参考までに池田作の歴史エッセイ

歴史エッセイ『源氏物語』誕生の時代背景

池田義光

紫式部が『源氏物語』を生み出した時代背景を考えるための大きなヒントになるのが、平安時代には貴族の女性、中でも宮中女官の手による優れた文学作品が綺羅星のごとく生み出されたということです。それはなぜなのかをまず考えて見ましょう。

(1) 貵族女性は婚姻のために高い教養と才能が求められ、高い教養を持つ女官が必要とされた

当時の貴族の婚姻は男性が女性の家を訪問する「通い婚・妻問婚・招婿婚」だったために、迎える貴族の出世や勢力拡大にとって官位の高い男性を娘のもとに通わせることは極めて大切なことだったのです。しかも夫婦の間に生まれた子は、母方で育てる習わしでしたので、孫が男の子で将来高い官位についた場合には、外祖父の得る利益も大きいものでした。

そして当時の高貴な女性は、男性の前では扇で顔を隠したり御簾ごしに会話したりして、男性に顔を見せないものでしたから、女性は髪がとても長いとか、女房装束（十二单）の着方やセンスがいいこと、そして高い教養が魅力とされたのです。教養としては、男女の会話は和歌で行われることが多く、優れた和歌が詠めることは必須でした。その上、漢文・漢詩の教養があれば、言うことがありません。

従って貴族は、娘婿に高貴な男性を射とめる手段として、娘の教養と才能の育成に力をいれたのです。娘に高い教養をつける方法は高い教養を持った女性を「女房」とすることです。「女房」とは、皇后や中宮など身分の高い女性付きの宮中女官で、高貴な女性のお世話をする侍女ですが、中には家庭教師的な役割をする女官もいたのです。

紫式部は摂政藤原道長に見込まれて、道長の娘で一条天皇の中宮彰子の女房となりました。また清少納言は、関白藤原道隆の娘で一条天皇の皇后定子の女房に採用されました。

(2) 平仮名は女性の文字だった

「平仮名」の誕生は平安時代の初めと言われています。

漢字は複雑で難しいものが多く、数も膨大でした。その大変さを克服するために生まれたのが「平仮名」です。「平」 = 易しいという意味で、漢字に比べて極めて簡単に書ける文字でしかも文字数が圧倒的に少ないので。もっと重要なことは「平仮名」は「表音文字」だということです。そのことによって、日本語を語順にそって音で表現できるようになったのです。

漢字を使って日本語を表わす工夫は、奈良時代に「まんようがな万葉仮名」として行われていました。「万葉仮名」は漢字の中国風発音（音読み）を使って、漢字の意味と関係なく「音」を借りて日本語の音に当てはめて日本語を表現する方法です。万葉仮名を用いると歌を日本語で表現できたので、『万葉集』で盛んに使われたから「万葉仮名」と言います。ただどの漢字が漢字本来の意味を持つ文字か、どの漢字が音だけの文字かの判別が難しいのです。そのために漢字とは違った文字で、しかも漢字より簡単に書ける文字作成の必要性が出てきたのです。

ところがそれほど便利な「平仮名」を平安時代の男性はほとんど使っていません。わざわざ『男もある日記といふものを、女もしてみんとするなり』と、紀貫之が女性のふりをして『土佐日記』を書いたのは、男性なら漢字で中国語で書くべきところを、女性なら平仮名まじりの日本語で書けたからで、その方がずっと書きやすかったからなのでしょう。

当時は、「仮名 = 仮の文字」であって本当の文字ではない、漢字こそが「まな真名 = 真の文字」との扱いを受けていました。だから男性は漢字 = 真名で書くべきで、女性なら「仮名 = 仮の文字」を使っても仕方がないと考えられていたようです。ただし、例外として「和歌」の場合は、日本語表現だからでしょうか、男女ともに平仮名を使ってもいいようでした。

そのため、情景描写や当時の人々が自分の思ったことや感じたことなどを自由に豊かに表現することは、「平仮名」を使用する女性の得意となったのです。

(3) 宮中は華やかな生活と男女の交流の場

『源氏物語』は 54 帖にもわたる大長編で、貴族たちの宮中での華やかな生活と様々な男女の交流が題材として連綿と描かれています。それが当時の人々の興味を惹きつけました。なぜそんな世界と文章が書けたのでしょうか？ 一つには、当時の平安貴族の生活は経済的にも恵まれ、文化も成熟して、華やかな宮中生活が営まれていたことです。また、前述したように当時の貴族の婚姻は「通い婚・妻問婚・招婿婚」で、どんな男性が娘の元に通ってくるかが大切なことでしたし、また若い男性貴族側からもどんな女性と婚姻してどんな後ろ盾を得るかが重要なことでしたので、若い男女の交流は貴族にとっては極めて大事なことだったのです。そんな時代に、宮中で暮らしていた紫式部や『源氏物語』の読者である貴族たちにとって、華やかな宮中生活と男女の交流は大きな関心事であり、紫式部の物語の題材と描写に強く影響を与えたものと思われます。

(4) 物語文学への強い好意と支援があった

『源氏物語』を執筆時代には、「物語」に対するニーズと好意がかなりあったようです。

人々にとって平仮名主体の物語文学は、語順は普段使っている日本語で、助詞は平仮名で表され、使われる漢字は少なかったので、すごく読みやすいものだったと思います。しかも題材は最も関心の深い宮中の男女交流で、ストーリーと場面設定は架空というのもおもしろい。

紫式部がこの物語を書き始めると、早くも評判になり、宮中貴族の間でかなり読まれていたようですし、摂政道長が紫式部を中宮彰子の女房に採用したのには源氏物語の作者ということが大きくかかわっていたようです。一条天皇までが『源氏物語』の続きを早く読みたくて、紫式部が仕えた中宮彰子の元を頻繁に訪れたほどでした。実は当時は紙が大変貴重で物語執筆の障害となつたのですが、『源氏物語』執筆用の紙は、道長が支援してくれたと言われています。こうした数々の応援や評判がある他に、菅原孝標の娘が『更級日記』に書いているように、地方の貴族の元まで『源氏物語』の評判が聞こえ、ぜひ読みたい人たちは競って写本したようなのです。熱狂的な源氏物語ファンが数多かつたことも、『源氏物語を紫式部が書けた』ことの「時代背景」の一つだと考えます。

以上述べてまいりましたが、あくまでもそうした「時代背景」を基盤として、もちろん、「紫式部の個人的な理由」、つまり彼女の才能や境遇や運などがあったからこそ、『源氏物語』を書けたのでしょうことは言わずもがなことです。

勉強会2本目： 知って得する日本史豆知識

円城寺淳

①次の3府県で、最も古墳が多いのは [大阪府 奈良県 千葉県]

→答えは千葉県

②社会科教科書に「ドラえもん」が登場した。しづかちゃんの名前の由来は？

→答えは、静御前

③ 1549 年に来日してキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルの遺体はミイラとされ、インドのどこに保管されているか？

→答えは、インドのゴア

④ 1575 年の設楽が原の戦いの屏風絵に、武田勝頼の旗に「大」の文字が書いてある。その理由は？

→答えは、「武田が人の中で一番」という意味がある

勉強会3本目： 武田信玄はどうすれば天下が取れたか？

「武田信玄」は参加者の誰でも知っている有名人ですので、これも3人グループの学び合いの形式で行いました。これも一方的な講義形式より遙かに皆さんのが参加意欲が喚起され盛り上がりました。

皆さんからは、以下のようなたくさんの方の考えが出されました。

- ◎信玄が上洛して、朝廷と幕府を押さえることができたかが肝要
- ◎要は、信玄が天下取りをめざすかどうかで決まる。
- その他たくさんの方の考えが出たのですがメモを取り忘れました。

参考までに、池田作の歴史エッセイを紹介しました。

武田信玄の天下取りを考える

池田義光

[1] 信玄は西上作戦中病死しなければ、天下が取れたか？

1 武田信玄の西上作戦

武田信玄 52 歳の時、1572 年 10 月、徳川・織田を打倒し將軍義昭を助けて天下静謐を成し遂げるために大遠征「西上作戦」を開始したと言われる。武田軍はまず遠江・三河に侵攻して徳川の各地の城を攻めて連戦連勝し、三方ヶ原の戦で徳川・織田連合に大勝して、西へ向かった。翌 1573 年 2 月に三河野田城を陥落させた。ここから美濃を攻め、織田を破り上洛するかと見えたところで、突然甲斐に引き返した。帰国途上の 1573 年 4 月に信玄が 53 歳で病死した。



武田信玄の肖像画

2 <信玄が病死しなければ、信長を破って天下がとれたか？>

それまで武田軍の勢いがすごかったので、信玄が病死せずこのまま行けば、信長を破って信玄が天下をとったのではないかという推測が語られることが多い。しかし私は、その考えには否定的である。その理由を以下に述べる。

(1) 農民兵を帰郷させるべき時期

この頃の戦いは一般に秋の収穫後に出陣し、翌年春には帰陣することが多かった。と言うのはこの頃の戦は多くの農民を足軽などとして大量動員しているので、秋の稲などの収穫が終わらないと農民兵を大量動員できないし、春には田植えなどの農作業が始まってしまうので、農民を作業に戻す必要があったからである。武田軍も農民兵が多かったので、信玄の生死にかかわらず、4月は軍を引き上げるべき時期になっていたと思われる。

(2) 大軍による長期間の遠征は難しかった

大軍を動員して長期間戦いしかも長距離遠征するためには、大量の食料や矢や鉄砲玉・火薬などの軍事消耗品やその他の必要な物の運搬と、運搬のための荷車や土木・建築工事の道具と材料などが必要である。戦地の村から略奪で全量をまかぬことはできないので、必要最低限は出陣の時に用意して持つて行く必要があり、半年以上も遠征を続けることは大変困難であった。

武田西上作戦軍は信玄が推定 2 万 2000 の兵で 1572 年 10 月 3 日に甲府を出陣。重臣の山県昌景と秋山信友が 3000 の兵で 9 月 29 日に出陣。推定計 2 万 5 千人で出陣して各地で戦闘を続け、翌年 2 月 10 日野田城攻略まで大遠征を続けた。4 月に全軍帰国の途上 12 日信玄が死去した。しかし武田軍は、この時点では兵糧その他も殆ど付きかけていて、信玄の生死にかかわらず、早く帰国する必要があったのではないかだろうか？

(3) 織田軍と武田軍では戦力の質と量が違う

信玄が病死せず、農民兵を帰国させずほぼ2万の軍で、戦いに必要な物資も何とかあったとしても問題がある。兵の士気が気がかりだ。武田遠征軍はもう半年も戦い続けている。物資もいつまで持つかわからず耐乏生活をしているだろう。武将はともかく足軽たちの士気はどうであろうか？足軽たちは基本的には領主への忠誠心よりも損得や仕方なく従軍している者が多いので脱落・逃亡は多い。多くの脱落者がでれば、兵力は激減してしまう。

一方の織田信長軍の方は金を貰って戦う傭兵が多かったので農繁期でも問題は無いといわれる。その上 1573 年の武田軍の遅々とした動きに疑惑を抱いて、三河戦線を放置し 2 月から反攻に転じ、2 月 26 日に近江石山城の山岡景友を降伏させ、2 月 29 日には今堅田城の六角義賢らを攻略した。畿内の敵勢力を着実に倒した信長は、対武田に対し、動員可能な兵が半年前より増加したと思われる。実際に、1573 年 7 月に足利義昭との「楨島城の戦い」では、義昭軍 3500 に対し、織田軍は 7 万だったと推定されている。

(4) 長篠の戦いの再現

信長は 2 年後の 1575 年の「長篠の戦い」で武田勝頼軍を完膚なきまで打ちのめしている。もし 1573 年にも大量の鉄砲の使用など長篠の戦いで戦術を幾つかでも使うことができれば、信玄存命の武田軍にも勝利することは間違いないと思う。

【2】武田信玄が若いときに天下を狙っていれば <それでは武田信玄には天下取りは不可能だったのか？>

「天下取り」とは「畿内静謐の実現」とすれば、それは信長が成し遂げたことであり、信玄ももっと若い頃に天下取りを狙っていれば充分に可能であったと私は考える。

1 武田信玄の前半生

(1) 武田信玄の33歳まで

武田信玄は、1521 年に甲斐国の守護・武田信虎の嫡男として生まれた。

1541 年、21 歳の時に父武田信虎を駿河国へ追放し、武田家の当主になった。

1542 年、22 歳の時に信濃国侵攻を開始。諏訪領へ侵攻し、諏方頼重を降伏させ自害に追い込む。

1545 年、4 月に伊那郡の高遠頼継を追放し、6 月に福与城主藤沢頼親を降し、上伊那郡を支配。

1546 年、佐久の内山城・大井貞清と志賀城・笠原清繁を攻略した。

1548 年、信濃国上田原の戦いで北信濃国人の村上義清に敗北したが、その後、塩尻峠の戦いで信濃国守護・小笠原長時に勝利した。

1550 年、信濃国中部の松本平を制圧したが、その後、村上義清の砥石城を攻めるも大敗。

1551 年 5 月、武田配下の真田幸綱が砥石城を乗っ取った。10 月、松本平の平瀬城を攻略。

1552 年 8 月、安曇平の小岩嶽城を攻略。

1553 年、信玄 33 歳の時に、1 月に仁科惣領家が武田氏に服属し、武田氏が信濃国中部制圧に成功。4 月から北信に侵攻し刈谷原城・塔の原城を攻略。村上義清と戦う。義清が越後国に逃亡し、長尾景虎（上杉謙信）を頼る。9 月に景虎が信濃に出兵し「第一次川中島の戦い」が起こる → 以後 1564 年の「第五次川中島の戦い」まで続くが、結局決着つかず。

(2) 武田信玄はいつまでに天下取りを目指せば

33 歳までの武田信玄を見ていると、この時期の信玄は天下を狙っていないようだ。その時その時の場当たり的な戦い方をしていて「天下取り」戦略が見えてこない。「天下取り」のためには、遅くとも 33 歳までには、天下取りを目指さなければならなかった。以下「武田信玄の天下取り」について考えたい。

2 「信玄の天下取り」には「信長の天下取り」戦略が参考になる

(1) 信長が天下取りを戦略目標としたのは

織田信長は 1567 年 8 月に美濃攻略を達成すると「天下布武」の印判を用い始め、古代中国の故事にちなんで稻葉山城を「岐阜城」と名称を改めたことから、美濃攻略の後に「天下取り」を目指したと言われている。しかし私は、信長はもっと前から「天下取り」を戦略目標にしていたと考える。稻葉山城攻略 3 年前の 1564 年に妹の市を浅井長政に嫁がせて北近江の浅井氏と結んだのも、目下交戦中の美濃

の背後を固めるという狙いの他に、将来の上洛の布石を打ったのだと思う。1567年春に北伊勢を攻撃し一部を支配下においたのも都への足がかりだったのだ。もっと言えば、「桶狭間の戦い」勝利後に今川領に進攻するのではなく都に近づく美濃攻略を目指したのも実は「天下取り」をめざす戦略であったと私は考える。

(2) 信長の「天下取りの戦略方針」とは何だったのか？

＜信長が上洛し足利義昭を将軍にするまで＞

1552年：信長19歳で父・信秀の他界により家督を継ぐ

1559年：25歳で尾張国を統一

1560年：27歳で5月に桶狭間の戦いで今川義元を討つ。6月に美濃侵攻を開始

1561年：28歳で2月に松平元康（徳川家康）と和議し、翌年同盟

1567年：34歳で斎藤龍興を討ち美濃を攻略

1568年：35歳で上洛し、足利義昭を室町幕府第15代将軍にする

こうした信長の行動から見て、＜信長の「天下取りの戦略方針」＞は

①まずは美濃を攻略し、美濃をその後の上洛と天下静謐（天下取り）の本拠地とする

織田信長は、1560年5月の桶狭間の戦い勝利の後、今川を破った勢いに任せて今川勢力下の三河・遠江への領土拡大を図るという方針をとらなかった。勝利の1か月後には、美濃攻めを開始した。＜なぜ美濃攻めなのか？＞これは美濃が豊かな国であったことと、都に近づくという理由があったに違いない。信長の頭にはすでに上洛と天下取りがあったのではないかと考える。

信長は、1560年6月に美濃攻略を開始し、1561年2月に徳川家康と和睦し翌年に同盟を結び、三河・遠江の今川は徳川に任せている。更に甲斐・信濃の武田とは戦わない方針の下、1565年11月には織田信長の養女を武田信玄の息子・勝頼に嫁がせている。こうして美濃攻略に全力を注ぐ。

②美濃攻略後は、上洛の準備をし、上洛を果たす

1) 北近江浅井氏との同盟： 美濃攻略3年前に妹の市を浅井長政に嫁がせて北近江の浅井氏と同盟を結び、目下交戦中の美濃の背後を固め、併せて京都進出への布石とした。

2) 北伊勢の攻略：信長は美濃攻略の翌年に北伊勢を攻略して、上洛の準備を進めた。

3) 足利義昭の上洛を助ける大義名分で上洛を果たす：越前朝倉に身を寄せた足利義昭の上洛支援呼びかけに応じる大名がない中、信長は1568年7月に岐阜城に足利義昭を迎えると、9月7日、尾張・美濃・北伊勢の自軍兵力約5万の他に、三河徳川軍と北近江浅井軍の応援を含めた大軍で義昭上洛軍を出発させた。上洛を邪魔する六角氏の拠点箕作城と観音寺城をわずか2日で落城させて、9月26日には京都に入った。そしてただちに京都周辺の抵抗勢力・三好三人衆軍を擊破して、10月18日には足利義昭が朝廷から第15代将軍に任命されたのである。信長のこの行動の素早さは驚異的でさえある。

③その後に畿内平定戦を行い、畿内静謐（天下取り）を成し遂げる

3 武田信玄の天下取り戦略方針を考える

(1) 北信攻略に向かわず美濃攻略に向かうべきだった

信玄33歳の時、1553年に、信濃中部制圧に成功した時点で、北信地域侵攻には向かわず、村上義清との戦いや長尾景虎（上杉謙信）との「川中島の戦い」をせずに、美濃攻略に向かうべきだった。

①なぜ美濃攻略を狙うべきなのか

1) 美濃は濃尾平野という豊かな穀倉地帯を抱えている

1石の米は1人のおよそ1年間の食糧になるという。従って米の石高が多いほど多くの人口を養えることになり、経済活動が盛んで人々の暮らしが豊かになり、領主としては多くの年貢と兵士を得ることができる。

武器・武具・食糧・土木工事などは金のかかることなので、領主は財力が豊かなら、それだけ戦に有利になる。また、村から百姓を兵にとるだけでなく、



1560年頃の勢力図

兵の一部を金で雇用し常備兵を持つことも可能になる。

事実、信長の場合、尾張を支配して 1560 年 6 月に美濃に侵攻した時の兵は 1 万人程度と言われているが、尾張・美濃・北伊勢を支配して 1568 年 9 月に上洛の軍を起こした時には約 5 万人の兵だったと言われている。美濃支配の効果は大きい。

2) 美濃は都に近く上洛への足がかりとなる：上洛は天下取りの必須条件

戦国大名が、自らの領国ではいかに絶大な権力を持ったとしても「天下人」としての権威・権力は承認されないのである。戦国時代とは言え、当時最大の権威を持つ天皇（朝廷）と将軍（幕府）を後ろ盾にするしかあるまい。その両方が存在する京都を押さえ、天皇（朝廷）と将軍（幕府）を援ける形を取るために「上洛」は天下取りの必須条件である。

②北信地域はこの段階で狙うほどの意義がない

1) そもそも信濃は山がちで耕地に適した土地が少ないために、さほど多くの収穫を期待できない。それに海にも遠くて港もないなど、領国としての経済的な魅力が小さい。人口も領民や兵の数も多くは期待できない。

2) 北信の支配を目指すと上杉謙信との長期の消耗戦が必要となる

上杉とは戦うべきでない。以後何回も川中島の戦いをやって勝負がつかない。上杉との戦いを避けられるなら、北信を取られてもさほど打撃はない

③北条や今川ともできるだけ戦いを避けて、ひたすら美濃征服と上洛を目指すべき

史実の武田信玄は北条氏や今川氏ともかなりの回数戦っているが、上杉・北条・今川とは、多少北信や甲斐の一部を譲ってでも、戦いを避けたい。

(2) 信玄の具体的な天下取りを考える

遅くとも信玄 33 歳の 1553 年から天下取りの戦略に取りかかる。

①まず美濃攻めを信濃のどこから行うか

何回も美濃攻めをするためには大量の兵や物資を集めて用意するための根拠地がほしい。木曽谷なら美濃に近いが、平地が少なく、何回も美濃攻めをするための大量の兵や物資を用意するための根拠地とはしにくい。伊那谷の飯田付近は木曽よりも平地があるが、美濃までの山越えが大変。信長は美濃攻めのために美濃との境に近い小牧山に築城してここに家臣団を集めて美濃侵攻の本拠地とする「本拠地移転」という当時としては革新的な方法をとったが、信玄も本拠地が甲斐の甲府では美濃まであまりに遠いので、信濃国に本拠地を移動させておくべきである。そこで飯田付近に城構えて美濃攻めの根拠地にするか、松本平の深志城を修築して本拠地にしてそこから木曽谷を通って美濃を攻める方法がある。

②美濃攻めの開始

美濃は、尾張の 2・3 倍の広さで、かつ湿地帯で河川が入り組んでおり、攻めにくく土地であるだけでなく、斎藤家は有力武将が多く、軍勢は 2 万以上いたので、信長軍も美濃攻めには 7 年もかかってから、美濃攻略は簡単なことではない。信長は、1567 年 8 月に斎藤龍興を追放し美濃攻略を達成するのだが、信玄の天下取りのためには、信長が達成するより前に信玄が美濃攻略を達成することが絶対必要である。

③1556 年 4 月 20 日までに東美濃攻略できれば

美濃では、斎藤道三から家督を譲り受けた長男・斎藤義龍が、1555 年に弟二人を殺害し、父道三に対して挙兵し、翌 1556 年 4 月 20 日に、道三軍 2700 人と義龍軍 1 万 7 千人が激突し、道三が戦死した。武田信玄が美濃攻めをしているなら、この時が大きなチャンスだった。このチャンスに武田軍が 1 万 7 千人以上の兵で美濃攻略かせて東美濃だけでも征服していれば、1560 年の桶狭間の戦いに充分間に合う。

④1560 年の「桶狭間の戦い」前までに東美濃攻略

美濃攻略を尾張の信長と競うことになったり、美濃攻略後も尾張の信長と戦いながら上洛を目指すのはかなり困難なので、信玄 40 歳の 1560 年「桶狭間の戦い」までにせめて東美濃だけでも攻略しておきたい。東美濃は木曽や伊那よりも平地があり豊かな土地なので、東美濃攻略後に本拠地が移転できればさらに良い。桶狭間の戦いまでに東美濃攻略ができていれば、1560 年の「桶狭間の戦い」で信長を討ち取るチャンスが来る。桶狭間で今川義元討ち死にの直後には、尾張北部と清洲城ががら空

きだったからである。そのチャンスに東美濃から信長を攻めて、その後急成長をするはずの織田信長を倒しておくことが可能になる。この時に信長打倒が実現できていれば、信玄の美濃攻略とその後の上洛はかなり可能性が高まる。

⑤桶狭間の時に信長を倒し、その後美濃を攻略し、義昭の上洛を扶け畿内平定戦を行う

こうして 1560 年までに東美濃を攻略し、信長を打倒しておけば、その後は、信長がやるはずだった戦略方針と同様に、三河・遠江の今川は徳川に任せ、上杉・北条とはできるだけ戦いを避けて、美濃全体を攻略する。それが達成したら、足利義昭の依頼を受けて、大軍で上洛を達成する。その後、天皇と将軍を扶け、畿内の平定戦を行い畿内静謐を図ることで、1573 年 53 歳より前に「信玄の天下取り」を実現することができる。

こうすれば「信玄の天下取り」は充分に実現可能だったのである。

《懇親会の報告》

勉強会の後は、いつものように船橋駅周辺の居酒屋に移動して楽しい懇親会を開催しました。

社会科セミナー事務局長交代

今回をもちまして、本会（船橋市社会科セミナー）の事務局長を富澤真也さんから強田裕一さんに交替します。富澤さん、今まで長らく会計管理や会場確保など様々にご尽力いただきましてありがとうございました。

強田さん、お仕事をやりながらで恐縮ですが、これからよろしくお願ひいたします。

次回社会科セミナー

**勉強会開催日時及び会場は
決まりましたら会員宛ショートメール
&このホームページでお知らせします。**